

## 飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

### 第 153 回 「完璧さ」の妙技！～アルバン・ベルク弦楽四重奏団

2006.6.11

先日、アルバン・ベルク弦楽四重奏団(Alban Berg String Quartet)の演奏会に行った。この弦楽四重奏団は、1970年、ウィーンフィルのコンサートマスターだったギンター・ピヒラー(G.Pichler)が同僚と結成したもので、精緻なアンサンブルは評価が高く、世界最高のカルテットのひとつといわれている。

曲目はモーツァルトとバルトーク、結論から言えば、実に見事な素晴らしい演奏だった。音楽だから、ゴタゴタ言わず、ただ楽しんでいけばいいのだが、ちょいと一言、言ってみたくなのが「自称・ものを言うクラシックファンの飯島賢二氏～なんのこっちゃ～」、困った悪癖(?)だがお付き合い願う。

何が見事かといえば、そのバランス感覚。ライブ演奏であるにも拘らず、出てくる「音」はまるで「オーディオ」そのもの、ミキシングも残響処理も、ミス編集も何もいらぬ、近代最高技術を駆使したAVを見ている錯覚に陥る。こんな感動を体験したのは、1975年、G.セル指揮のクリーヴランド管弦楽団来日公演以来、実に30年ぶりの興奮であった。

そしてその根底にあるのは、しっかりした技術力である。一糸乱れぬテクニクは、言ってみれば「完璧」そのもの、とりわけバルトークにいたっては、これ以外の演奏はありえない...、「完璧さ」の妙技を見せ付けられた。

さらにその演奏スタイル。まるでピリオド奏法かと間違えるほどボリュームに幅があり、ピッチが幾何学的なまで合っているゆえ、したがって、音楽に「厚み」がある。それでいて要所要所ではレガートをを用い見事に歌いきる。あたかもローマ時代の彫刻の如く、鋭い「キレ」とメリハリがあり、思わず啞然とさせられる。

聴いている方は、一瞬たりとも気が抜けぬ。体感的温度とは関係なしに、止めどなく汗が滴り落ちる。緊張感と戦いながら、身動きせずに音楽にのめり込んで行く。バルトークが終わった後は、拍手をするのも忘れ、言いようのない疲労感にドツペリと浸っていた。

バルトークはこれでいいかもしれない。

でも彼らは、モーツァルトも同じ演奏思想でやってしまう。この「完璧さ」の妙技をモーツァルトにも当てはめた時、嘗てから抱いていたモーツァルトのイメージが、とっても窮屈で、余裕のない存在に聞こえてしまう。小生独自の「モーツァルト観」ゆえ、異議、批判、色々あるのは当然だが、得体も知れない「違和感」を拭き切れない。テクニクも演奏スタイルも見事で素晴らしい、間違いなく超一流の演奏であるにも拘らず、この違和感は何だろう。そんな、自問自答を繰り返しながらコンサートホールを後にした。

でも、二三歩歩いたら、頭の中は、「美味しいチーズとワインで、ナイトキャップを楽しむこと」だけ、とってもラヴリーな演奏会であった。